

ラ・ボエーム

作曲：プッチーニ

初演：1896年2月1日、アルトゥーロ・トスカニーニの指揮によりトリノ・レージョ劇場

主な配役とパート

ミミ ソプラノ

ムゼッタ ソプラノ

ロドルフォ テノール

マルチェッロ バリトン

コッリーネ バス

ボエーム

1830年頃のパリにて

第1幕 クリスマス・イヴの午後。カルチェ・ラタンにあるアパートの屋根裏部屋。詩人（の卵）のロドルフォ（Rodolfo：テノール）と画家（の卵）のマルチェッロ（Marcello：バリトン）が薪無しのストーブ（勿論火もない）を囲んで創作に励んでいます、あまりに寒い。ので、二人はロドルフォの傑作戯曲（自称）を犠牲にして暖を取ろうとします。そこに哲人（自称）コリーネ（Colline：バス）も加わりますが、情熱的な中身に反してあまりに儂い原稿。そこへ御大尽の如く現れた音楽家（の卵）ショナール（Schaunard：バリトン）が御馳走やら薪やらをアルバイト（小鳥へのレッスン-ついでに抹殺）の謝礼に巻き上げてきます。喜んで大騒ぎする一同。ところが、家主のベノワ（Benoit：バス）が滞納中の家賃を取り立てにきます。仕方なく部屋に入れて一杯飲ませ、ベノワのたわいない女好きな話を聞き出すや「淫らだ！」とかなんとか攻め立てて、追い出してしまおう一同。折角のクリスマス・イヴの夕方、みんなで街へ繰り出そう！となりますが、一人ロドルフォは原稿の締め切りがあるからと、後に残って原稿書き。とはいえ、すぐに「気が乗らないや」と飽きてしまいます。（何故か親近感を感じるの...（"）/＜筆者）そこにノックの音。ドアを開けると、そこには可愛らしいお針子姿の女の子。他の部屋に帰る途中ロウソクが消えてしまったので、火を貰いに来たのですが、気分が悪くなってしまいます。介抱するロドルフォ。回復して、帰ろうとする女の子。ところが、部屋の鍵を落としてしまったのに気付く、鍵を探します。隙間風で消えてしまう女の子のロウソク。都合よく消えるロドルフォのロウソク。昏い中、手探りで鍵を探しつつ、何故か徐々に近づく二人。ロドルフォの手が女の子の手に触れ...（これよりプッチーニ奇跡の15分）ロドルフォ、詩人（の卵）の本領発揮、「冷たい手を *Che gelida manina*」と、古今東西テノール最強の口説き落としアリアを歌い（ま、あの *speranza!*（希望）で落ちるよな）、情熱的な自己紹介と共に、女の子を口説きます。それに応えて「私の名はミミ」と、こちらもなかなかのアリアでもって、自分の本名はルチアだけれど、皆はミミ（Mimi：ソプラノ）と呼ぶのよ、と名乗ります。アリアが終わると、下から野暮天3人の呼ぶ声。ロドルフォは「おお、美しい娘よ *O, soave fanciulla*」と、素晴らしい二重唱で更に口説きます。遂に、悪友達と一緒に街へ繰り出すことを承諾するミミ。「その後は何？」とロドルフォ。「ばかね...」とミミ。愛を語りながら部屋を出て行く二人。

第2幕 カルチェ・ラタンの繁華街は大賑わいの大混雑。通りの店や屋台を冷やかしながら、カフェ・モミュスに各々向かう一同。ロドルフォはミミにボンネット（帽子というか髪飾りというか）を買ってあげます。どうにかこうにかカフェに辿り着く一同。ロドルフォはミミを皆に紹介します。通りではパルピニョールの玩具屋台がやってくるので、子供達で大混乱。母親達は半狂乱で子供を屋台から引っぺがします。「ラッパとお馬が欲しいの...（;_;) /」と子供。「クリームを頂戴」とはミミ。一同いざ乾杯！というところへ、けたたましい女の笑い声。「俺に毒をくれ！」とはマルチェッロ。声の主は街の人気者にしてマルチェッロの元恋人・ムゼッタ（Muzetta：ソプラノ）。愛人（というか小心者のパトロンにして荷物持ち）のアルチンドーロ（Alcindoro：バス）と一緒に買い物が出て繰り出していたのでした。すぐにムゼッタもマルチェッロに気付きます。わざわざやきもちを焼かせよう！と注意

を引きますが、マルチェッロが殊更に無視しようとするので、癪に障って皿を割るわ叫ぶわと大騒ぎ。要するに二人とも満更じゃないのに、意地を張り合っているのです。業を煮やしたムゼッタ、遂に「私が街を歩くと Quando men vo soletta per la via (ムゼッタのワルツ)」と歌い、マルチェッロはとうとう抗し切れなくなります。悲鳴を上げて、「足が痛いわ、靴を買ってきて！」とパトロンを追い払うムゼッタ。哀れなパトロンが姿を消すや、ひとと抱き合う二人。一同めでたしめでたし、というところに、軍隊の行進の音と共にやってきたのは請求書。「こんなにするの？」と青ざめる一同。その時ムゼッタ少しも騒がず「こちらの紳士が払って下さるわ」と、請求書をおじさまのテーブルに付けるように指図して、一同店を出ます。警備兵の行進に盛り上がる街。戻ってきた紳士はもぬけの殻のテーブルと請求書を見て途方にくれるのです。

第3幕 あれから2ヶ月後の冬の明け方、市門の前。脇には、飲み屋があります。中からはムゼッタの歌声。門が開き、農婦らが行き交った後にミミが現れ、飲み屋を訪ね、マルチェッロを呼びます。やってきたマルチェッロに、ミミは、最近ロドルフォの様子がおかしい、荒れているのだけど、どうしてしまったの？と訴えます。そこへ、飲み屋に来ていたロドルフォが外へ出てくるので、ミミは木陰へ隠れます。ロドルフォに一体どうしたんだ？と尋ねるマルチェッロ。ロドルフォはとうとう白状します。実はミミは病気なんだ、結核なんだと。自分と貧しい暮らしをしては病気は悪くなるばかり。というより助からない。どっかのパトロンにでも困って貰った方がまだ彼女のため、と嘆くのです。聞いてしまったミミ、「私、死ぬのね...」と嘆き、咳き込んでしまって、ロドルフォに気付かれます。慌てたマルチェッロ、丁度ムゼッタが客の男といちゃいちゃしているのを窓越しに見て、すっ飛んで行きます。ロドルフォに介抱されるミミは、「別れましょう、それがお互いのため」と、ロドルフォに別れを提案します。「荷物はまとめておいて。でも、あなたがくれたあのボンネットは持っていてね。」とミミ。「春になれば太陽が共にいてくれる」と歌い、別れを惜しむ二人。重なるように罵り合いながら店から出てきて、「蛇め！」「蛙！」といがみ合うマルチェッロとムゼッタ。愛と痴話喧嘩の4重唱のうちに別れる二組なのです。

第4幕 春。あの屋根裏部屋。いつかのようにロドルフォとマルチェッロが仕事をしながら話しているのは、ロドルフォが見掛けたムゼッタの話。返す刀でマルチェッロはミミを見掛けた話をします。不機嫌に仕事に戻りますが、投げ出してしまふ二人。各々、自分の元恋人のことを思い出し、ロドルフォはあのボンネットを、マルチェッロはムゼッタのリボンを取り出して、「もう帰らないミミ O Mimi tu piu non torni」と二重唱を歌います。昼食を調達に行っていたショナールとコリーネがパンとにしんを抱えて戻ります。貴族の会食の如く振る舞い、悪のりして舞踏会から決闘のまねごとに至る一同。そこへ、ムゼッタが駆け込んできます。ミミを通りで見つけたので連れてきた、ミミはロドルフォのところで死にたいと言うのだ、と。ベッドに寝かせられたミミ、懐かしそうに部屋を見回し、一同に声を掛けます。マルチェッロには、ムゼッタはいい人よ、と語り掛けるのです。ミミのためにと、ムゼッタは耳飾りを売るように頼み、マルチェッロと出ていきます。コリーネは「古い外套よ Vecchia zimarra」と愛用の外套に質屋への別れを告げ、ショナールと共に出ていき、ロドルフォとミミを残して立ち去ります。二人きりになって、ミミはロドルフォに「貴方は私の愛で私の人生の全てなのよ」と語り掛けます。出会った時のことを懐かしく思い出す二人。急に苦しそうに咳き込むミミ、帰ってきたショナールとロドルフォが介抱します。ムゼッタがくれたマフに手を包んで、いつしかミミは眠りに落ち.....亡くなります。知らずに祈るムゼッタ。落ち着かないロドルフォ。ショナールがミミの異常に気付き、マルチェッロに「息がないぞ...」と告げます。誰もロドルフォに告げられず、遂に皆の異様な雰囲気気付き、「何故そんな風に俺を見るんだ！」とロドルフォ。「しっかりしろ！ Coraggio!」とマルチェッロ。ベッドに駆け寄るロドルフォ、ミミをかき抱き、その名を絶叫します。ロドルフォの嗚咽の内に、幕。

著作・作成 ぐえるでい・Voce